

硯 滴 考

[I]

平成三十年六月十二日

公益財団法人

大平正芳記念財団



硯 滴 考

[1]

目次

はしがき	3
長男正樹との永別	6
ぼくのマドンナ	16
政治家が聖書を読むとき	21
転換期における自由民主党の在り方	34
新権力論	48
成田委員長のよさと限界	53

はしがき

弊財団は、皆様方の温かいご支援の下、本年度で設立三十四年を迎え、理事会、評議委員会、選定・運営委員会、大平記念館の移設などの世代交代をほぼ果たしました。それに応じて、財団活動にも新しい事業としまして『硯滴考』と題する小冊子を発行する運びとなりました。

この冊子は、祖父・大平正芳が生前に発行して好評を博した『硯滴』への思い入れを兼ね、判型も装丁もそっくり同じに、その名を『硯滴考』として、祖父のこれと思える原稿を中心に、年に二・三冊、発行することとした次第です。

ご案内の通り、大平正芳は、政治家にはめずらしく、数多くの文章を書き残しています。それらを蒐録して順次出版してきた著書は、没後出版の遺稿集、対談集も含めると八冊にのぼりますが、講談社から全集を出すまでは、そのほとんどが私家版で配布先も限られていました。

それに先立ち、祖父は、昭和四十一年、千駄木から瀬田に移り住んだころから、新聞に発表した原稿や、その間に書き溜めた論文・エッセイなどをより多くの方々に読んで欲しい

と、半期ごとに小冊子『硯滴』として、皆様のお手元にお届けするようになりました。小冊子にすれば、手軽に読んでもらえるし、より多くの皆様に配布できるという発想からだったのでしょうか。『硯滴』という祖父らしいタイトルと相まって、「中身の濃い小冊子」ということで評判となり、大平思想の理解・普及に一役買ったと聞いております。

今回の『硯滴考』シリーズの刊行は、そのひそみに倣つての企画です。

時は今、内外ともに嘗てない多端な状況下にあります。そんな中で、大平正芳の政治思想・哲学が何時になく注目を集めています。確かに、没後三十九年の時を経ても今なお新しく、むしろ当時以上に警世の指針となる原稿が多数あります。それらを選んで、改めて皆様にお目通しをお願いしようと思ひ至つた次第です。

掲載原稿は、①『大平正芳全著作集』七卷（講談社・平成二十二年～二十四年刊行）に依る本人の原稿を主体に、②弊財団発行の『大平正芳回想録』三部作、『大平正芳 政治的遺産』などの研究書に掲載の祖父所縁ゆかりの方々による大平論・大平評などと、③大平賞選定委員会ははじめ各界の先生方に、最新の知見を踏まえた「いま大平ありせば論」その他の新たな寄稿文を加えて、『硯滴考』Ⅱ「大平正芳の研究」という目的に叶うシリーズにしたいと願っています。

以上の趣旨をご理解頂き、本シリーズに格別のご支援・ご協力をお願い申し上げます。これにより、大平思想の一端に触れて頂き、現下の日本とその将来を見据える糧にして頂ければ幸甚です。

つきましては、茲許、第一号をお手元にお届け申し上げます。前半三点の原稿は人間・大平正芳をお知り頂く一助として、後の三点は迫りくる未曾有の外患を等閑に付し、不毛な政争に明け暮れる政治への頂門の一針の願いを込めて選んで見ました。

お暇な折にご高覧・ご高見をたまわれば、これ以上の喜びはございません。

平成三十年六月十二日

公益財団法人大平正芳記念財団

理事長 大平 知範

長男正樹との永別

昭和四十一年八月に執筆したもので『春風秋雨』の随想欄に収録。

後に加筆訂正し『私の履歴書』（日経）、『大平正芳回想録・資料

編』、『大平正芳全著作集』2巻（講談社）に収録。

長男正樹は、昭和十三年二月六日、横浜の磯子で生れた。当時私は横浜税務署長で、住居は芦名橋の近くにあり、磯子の浜から一町ほど離れたところにあった。どこか磯の香のする閑静な住居であった。

当時の横浜は、関東大震災の傷跡が未だに残っており、名古屋や神戸に較べて、担税力も弱かった。外国貿易の主導権は、すでに日本橋や丸の内に移り、横浜は単なる中継貿易港に転落しつつあった。その頃の横浜には半井知事、青木市長、高橋税関長がおられ、定期的に若い税務署長の私を昼食に招いて何くれとなく指導して下さった。また市井の人々には、いわゆる「浜っ子」に特有の気質があつて、何となく親しみやすかった。私も住むにつれてだんだん横浜に惹かれるようになり、その後大蔵本省に勤務するようになってからも、横浜の

本牧に自宅を構えて、三年ほど厄介になったものである。

長男正樹が生れた年の七月、私は仙台国税局（当時の税務監督局）の間税部長に転勤を命ぜられ、私ども一家は仙台に赴任した。その頃の彼はどちらかといえば蒲柳の質で、よく病氣もしたし、痛の強い神経質な子であった。昭和十四年六月、東京に帰ってから牛込に住み、戦争末期には九段の暁星学園初等科に入学した。神楽坂を下りて、国電飯田橋駅の前を通って通学していた彼のあどけないランドセル姿が今なお忘れられない。このミッシヨン・スクールに入学したが、後年彼がキリスト教に入信する機縁になった。

昭和二十年に入って戦争はいよいよ最悪の段階に踏み込み、空襲は日増しに激化していった。牛込の私の家の前には川合玉堂画伯、左横隣には歌舞伎の中村吉右衛門丈、右横隣には古河財閥の総帥古河從純氏がそれぞれ住まっておられた。古河家には大きい立派な防空壕がつくられていて、私の家族は、よくその防空壕を利用させてもらっていた。昭和二十年五月の空襲の時、私は正樹を連れて例の防空壕に待避したのであるが、彼は私の制するのも聞かないで壕から抜け出し、東京の夜空を真昼のように真赤に染めて降りそぐ爆弾の雨を見たがら、「お父さん、綺麗だよ。出て見な」といいながら手をたたいているのである。その時の邪気のない顔も忘れられないスナップである。

それから間もなく、牛込の家は戦災のため灰燼に帰したので、私は妻と子供を岩手県の一関市在の親類に疎開させた。正樹は岩手県の小学校に通学していたが、親類には醤油屋もあれば食料品店もあり、薬屋もあれば呉服屋もあるという具合で、何不自由なく戦争末期をごさせてもらった。九月に帰京してからは、彼は最寄りの千駄木小学校に通った。有名な落語家志ん朝さんとは幸に同級であつたが、四年生になつてからはもとの暁星学園に復帰した。フランス語担当の大橋先生に見出だされて、フランス語の演劇に出してもらつたことが、とても嬉しかったようである。

暁星学園の初等科から中等科を了えて、彼は成城学園の高校に入學した。それから三年間、最寄りの国電日暮里駅から新宿を経由して小田急線を通學した。病弱だつた彼も、高校時代からはメキメキ体力が充實して、活動も活発になつてゐた。小野嘉寿雄先生の愛情のこもつたスパルタ式な教育で随分と鍛えられたようである。小児科の和田先生夫人の紹介で本郷のテモテ教会に日曜毎に通うようになり、同教会の高瀬恒徳先生ご夫妻に私淑するようになったのもその頃のことである。その道縁は彼の死まで続き、告別式もまた同教会で、高瀬先生の司祭の下に行われた。

成城学園の高等部から慶応大学の法学部に進んだのは、昭和三十年の春であつた。大学に

入ると例によつて運動各部からの勧誘があつたが、私は正樹から「合氣道をやらせてもらいたい」という申し出を受けた。「合氣道」なるものがどんなものか、全くの門外漢であつた私は、ちよつと返答に窮した。彼は異常なまでに真剣で、自分の全てをこの道に賭けるといわんばかりの意気込みであつた。私はやむなくこれを認めたのであるが、全国各大学にさきがけて慶応に「合氣道部」ができたのは、それから間もなくのことであつた。植芝先生との道交、さらには竹中脩介君等との交友は、この合氣道を媒体にして恵まれたものである。クラス・メートには鈴木茂夫君、森田正雄君、牧野恒久君等がいて、兄弟以上の交わりを終生続けることができた。彼の病床を見舞うことを日課のようにしてくれたのもこの人達であり、彼の死を最も悼んでくれたのもこの人達であつた。慶応では内山先生のゼミナールで、国際政治史を専攻していたようだ。

正樹は人と人との関係については、神經質なまでに細心かつ周到で、またとことんまで親切でもあつた。私の健康に対する配慮は妻以上であつた。祖父に対するいたわり方も格別なものであつた。眼や足がやや不自由になつてきた祖父の眼となり足となつて、各地の温泉を巡つたり、景勝の地を遍歴したりしてくれた。弟妹に対しては、その欠点を指摘するよりはむしろその長所を賞めて、よく励ましていたようだった。

正樹は不幸な人々に対する同情の念が篤かった。大学在学中も、眼の見えない高校生達のために毎週護国寺付近にある盲学校に行つて、彼等のもともめる本を読んであげていたことを私は後になつて知つた。また、その人達を自宅に招いて、食事を差上げたり、音楽を聞かせたりしたことも何回かあつたようだ。家のお手伝いさんと自分達家族との間に、食事その他の処遇に少しでも差別があれば、それは彼にとつて耐え難いことであつたようだ。

最近になつて判つたことであるが、自分の限られた小遣いをさいて、何年もの間貧しい友の学費を補給していたようだ。

慶応卒業後、私は正樹を神崎製紙株式会社に預ける決意をした。私の敬慕する先輩加藤藤太郎同社会長の膝下で、三、四年訓練させていただいた上、自分の下に引取ろうというのが私の計画であつた。彼も素直にそれに同意し、私の親友遠藤福雄君の管理下にある同社に入れてもらったのが、昭和三十四年四月であつた。

彼は、数カ月かかつて紙の工程管理の實際を勉強した。その後企画室に入つて、原価管理の仕事をやっていたようである。私は、工場といつてもそれは一つの巨大なヒューマン・リレーションズであるから、各工程で働く人々と本当の友となり、お互いに知り合い触れ合い感じ合ふなければならない。仕事と人が二重写しで自分の目に映ずるようにならないければ、

本当の原価管理等はできるものではないということを繰返し注意していた。彼もそのことに興味と誇りをもっていったようである。

彼が尼崎勤務中、自宅に帰ってきたのは正月休みだけであつたが、帰宅するや否や友人との打合せをしてすぐ出かけて行つたり、大勢の友達を連れて帰つてくるという始末で、終始ジツとしておれなかつたようである。永い間せき止められていた友情の流れを、一度にとり戻そうとしているように見えた。彼は尼崎工場にいたが、私がたまたま大阪や神戸に行くと、その行き帰り駅のホームの片隅からヌーと出てきて握手を求め、「いらっしやい」とか「気をつけて」とかだけいって、すぐまた人波のうしろにかくれていくのであつた。

私にとって、その大きい手のぬくもりと重量感がたまらなくなつた。ところが、その間、一度も小遣いをねだられたことはなかつた。

三年余りの修業がすぎたので、昭和三十七年の春、私は神崎製紙にわがまをいって、正樹を引き取らしてもらつた。前々から妻は彼を二、三年ドイツに留学させることを希望していたが、私は本来留学ということを好まなかつた。外国に留学することは外国を学ぶということだけではなく、それを通して日本をよりよく知るための方便に過ぎない。そのためにはそう永く滞在する必要はない、旅行だけでたくさんだというのが私の考え方であつたので、

私は正樹に外国旅行をさせることにした。

昭和三十七年七月一日、彼は四十カ国におよぶ野心的な計画をみずから立てて、勇躍羽田を發つてハワイに向けて出發した。たまたま私は、彼が出發して間もなくの内閣改造によつて、官房長官から外務大臣になった。そのことをロスアンゼルスで知つた彼は、父が大臣になつた以上、在外公館で厄介になつたりしては迷惑をかけることになるというので、終始自分の身分を秘して北米と南米の各地を旅行したようである。その年の九月、国連総会出席のため、私はニューヨークに行き、そこで彼と落ち合つた。

これから欧州にかけて約二週間、彼は私の私的随員という格好で一緒に旅行した。着替えから洗濯物までいちいち世話をしてくれた。彼の語学力は英語、仏語とも至つて弱くかつブローケンであつたが、なかなか大胆で日常の用を足していたばかりか、訪問国の外相その他の要人とよく談笑していた。とりわけオランダの外相ルンスさんとは余程気が合つていたようである。ローマ法王ヨハネス二三世に謁見を許された時は、いやに緊張していた様子であつた。私はその時、アメリカからロンドンに渡り、パリ、ローマ、ボン、ブリュッセル、ハーグを経てアムステルダム經由帰国したので、正樹とはアムステルダム空港で別れた。

その後彼は、単身旅行中ウィーンで歩行が不自由となり、已むなく二十日間も内田大使の

公邸で厄介をかける始末になった。彼の生命を奪った難病は、すでにその当時から彼の身体を冒しつつあった。内田大使ご夫妻やご家族のお心のこもった看護でやや小康を得たので、彼はアフリカ、中近東、東南アジアを回って、約束通りクリスマスの前日帰国した。

春になったので、私は彼を郷里香川県の方に挨拶がてら旅行させた。彼は香川県生れではないが、香川県人だという強い自覚をもっていた。学生時代も休暇の時は墓参によく帰ったものだ。彼は讃岐の春を心ゆくまで味わうつもりでいたようだ。たまたまその途次、彼は坂出市の親類森田家に投宿した。森田夫人がたまたま眼科医であるところから、正樹の眼球に原因不明の出血を発見して、病態の容易でないことを注意されたので取急ぎ帰京した。帰京後、東大病院で診察を乞うたところ、どうもこれはベーチェット氏病という世界的にも例の乏しい難病であろう、ということであつた。そこで直ちに、東大病院に入院して鋭意加療に努めたが、病状は日増しに悪化の道を辿るかのようであつた。私どもは東大の治療に加えて、注射、投薬、服薬、さらには指圧、マッサージ、遂には加持祈祷の類に至るまで、百方手を尽し懸命の努力を傾けたものである。

しかるに眼の出血は、その後もやむことなく、遂に右眼は失明に近い状況になった。病氣は漸次足の神経をも侵し、歩行中幾度かバランスを失って倒れることがあつた。その度ごと

に黙つて涙をかみしめつつも、少しも愚痴めいたことはいわなかった正樹であつた。身は病床にあつての死淵に近付きつつある苦闘の毎日であつたのに、ひたすら私の健康を心配し、食事や睡眠の時間についても、こまごまと家族の者に指示していたようであつた。私になるべく早く外相という激職をやめるよう勧めてくれたことも一再ならずあつた。付添いの看護婦さんによく本を読んでもらつたし、ラジオの放送はもらすことなく聞き、私の国会答弁や討論会についても、自分の感想や評価をそのつど率直に話してくれたものである。池田首相や田中蔵相の答弁や発言は、口調までもまねられるほどになつていた。好きな音楽の鑑賞も怠るところがなかった。しょっちゅう彼を見舞つてくれた友人知己は、かえつて彼に激励されましたといつてくれるありさまで、病床にありながら、彼の一日一日は、それ自体立派な生活であつた。

三十九年の春は逝き、いつの間にか青葉の五月を迎えた。東大病院に増改築工事はじまつて、環境が喧騒になつてきたので、主治医の方に往診を願うことにして、静かな自宅で療養させるべく私は彼を退院させた。その後、病勢は一向に好転のきざしをみせず、眼の力は衰え、手足の神経も順次侵されていった。しかし、彼の心境は、それでも少しも乱れることなく、いつものように自分のことよりも、他の人々のことを案じ、励ますことに終始した。八月五日より六日にかけて、病魔は遂に他の内臓を決定的に侵してきたとみえて、六日

の午後五時、高熱の中で「旅に出るから靴の用意をしろ」という言葉を最後に、私をはじめ家族の見守る中に、間もなく心臓マヒを併発し、遂に絶命したのである。

たまたま岳父から分け与えていただいた多磨霊園に、彼は私にさきがけて、彼が最も慕っていた祖父とともに永久の眠りについた。キリスト教が日本に渡来のおり、若年ながら従容として殉教死したパウロ・ミキという少年があった。彼は生前いたくこの少年に傾倒していたので、洗礼を受けた際、その名をそのまま自分のクリスチャン・ネームとしていた。私は「パウロ・ミキ大平正樹」と書いた小さい墓碑を立ててやった。それは父であり友であった私の最後の贈り物となった。一冊の聖書と十字架、彼が好きであったオモチャの自動車や、病中放すことのなかった人形やレコード、そういったものを抱いて、彼は息つく暇もなく活動し続けた二十六年の有限の生涯を閉じて、別に構えられた世界に立出して行ったのである。

正樹との永別。それは私が夢にだに考えなかったことである。しかるに非情にも、それは動かし難い現実となった。凡夫である私は生きる希望と情熱を失いかけた。彼はなにものにも代えられない、いわば私にとっては全部に近い存在であった。重い鉛のような悲愁が、鋭利な刃物のような力で今なお私の胸を刺し続けている。時日の経過によっても、その力は、一向に衰えをみせないのである。

ぼくのマドンナ

昭和五十三年十月十六〜十七日、「日経新聞」に発表した志げ子夫人論。

総理就任最初の訪米時には『私の履歴書』とともに英訳される。

『回想録・資料編』、『大平正芳全著作集』5巻に収録。

“ぼくのマドンナ”はだれだと聞かれても、私には直ちにこの人だという具体的なイメージが浮かび上がってこない。この答えは、尊敬する人はだれだという問いに対する答えよりも難しい。もちろん、私にとっても少年時代から学生時代、壮年時代から初老の今日に至るまでに、数々の心に残る美しい女性はいた。さらに、印象に残った小説の中のヒロインたちや名画に出てくる美人像、さらには歴史に出てくる様々な優れた女性像もある。

映画のヒロインは、例えばイングリッド・バーグマンのジャンヌ・ダルクであり、原節子であって、それらがいかに美しくとも、しょせん空想の中に住む女性で、われわれ人生の相對の世界に現実の姿で入ってくるものではない。

また小説に出てくるヒロインたちの中には、近寄り難いまでに美しかったり、限りなく心

優しい人が多い。すぐれて個性的であつたり、魅力的であつたりする女性である。しかし、そのいづれもが理想の女性の部分像にしか過ぎず、生きた全体像にはなつてこない。

ミロのビーナスやレオナルド・ダ・ビンチのモナ・リザも、女性美の典型であるといわれる。しかし、そうした映像や彫刻に美は感じて、そこに直ちにマドンナを感じることはない。結局、男性は、現実の人生の中で、具体的な諸々の経験を通して女性を発見し、見出していくものである。男にとって人生とは、現実の生活を通じて、理想の女性を求めていく過程であるといえるかも知れない。つまるところ、現実の実感をもって、マドンナを考えるとすると、終始自分の側にいる、例えば自分の妻の中に模索し、発掘するよりほかに道はないように思う。

男性の多くは、もちろん妻以外の女性と何らかの交渉を持つことがある。そうした女性の中にも、数々の魅力や美徳を覚えることがあるに違いない。しかしそれらの女性との間柄は、どうしても相対的で部分的になりやすい。妻の場合のように、絶対的、全体的なものにはなり難いようである。またそれは、それでよいのである。

私と妻の出会い、昭和十二年の春、平凡な見合い結婚から始まった。突然一人の女性がいつでも自分の側にいることになった。結婚については、洋の東西、古今を問わず無数の警

句や格言がある。それは「理想の放棄」であり、「現実との妥協」であり、「人生の墓場」であるとも言われてきた。それでいながら男性は年ごろになれば結婚する。

いかにそれが平凡で陳腐であろうと、彼にとってそれは重大な選択である。たとえそれが幻滅の始まりだとしても、それはいやしくも人生の価値を損なうような選択ではないはずである。

私と妻との生活は、結婚以来四十一年を超えた。それは平穏なものであった。妻も私も平凡な女であり、男である。しかし、マドンナはだれかという設問を前にして、私は私の妻の中に、いくつかの女性のもつ美德というものを感じる。それは貧しいものではあるが、私にとってはかけがえのない貴いものである。

私は、まず妻に一貫して私と子供に対する真剣な献身を感じる。そしてそれは、結婚式の言葉ではないが「健やかなるときも、病めるときも」また「得意のときも失意のときも」変わることはなかった。献身というのは、自分のことより、献身の対象のことを重くみて、その人のために自分の一部ではなく、その全部を献げることである。そこには微塵の打算もなければ、見栄のかけらも伴わない。

妻は私の健康のことを昼夜をわかつず心配してくれる。食事のことはもとより、運動、休

息、睡眠のことにも絶えず注意を怠らない。健康といえど肉体的な健康にだれよりも敏感であるが、より以上に私の精神的な健康に敏感である。このことこそは、何といつても女の美德である。私にとつてはマドンナの貴い属性であるといえよう。

子供をもつということは、女の大きい負担であるが、同時に大きい誇りでもある。子供を産むことは、女にとつて最も手ごたえのある生きがいであり、最も誇り高き役割の一つである。子供をもった女の姿こそは、マドンナの属性の中でも最高のものであろう。妻も幸いに四人の子供に恵まれた。そんなに健康でもないのによく産んでくれたものだ。子供たちも妻に対してよくなつているし、友達としてよく行動を共にしている。その情景は美しい。子供たちもそれぞれ家庭をもつようになり、今では、私たち老夫婦だけが取り残された格好になつているが、事あるごとに妻と子供たちは集まつてだんらんする。そしていつも妻がその中心にすわっている。それは彼女にとつては最も得意な時のようである。

親類、縁者、友人等とのつき合いの大部分は何と言っても妻の仕事である。つき合いの場は人生にとつてのオアシスである。そこには相手に対する尊敬と評価も大切であるが、相手に対する奉仕と親切心がなければならぬものである。短い人生で恵まれた機縁は、それがどんなに小さいものであつても大切にしなければならぬものである。人生はそこ以外には

なく、その機縁をどのように大事にしていくなか、人生そのものであるともいえるからである。

妻の役割は、この諸々の機縁の結び目を大切に保守し、これに絶えず水をやり、施肥することである。妻はこのことを面倒がらずにやっている。社会的地位の高低や、貧富の差などにより態度を変えることなくやってくれている。

私は、このことから、渴いた世の中に潤いを、騒々しい世の中に平穩を、とげとげしい世の中に和らぎをもたらすのが、天が女に期待している大切な役割のように思われてならない。

部屋や庭の清掃も妻の大切な仕事であるが、特に感ずるのは、妻は私より道義的潔癖さが強いということである。物事の道義的鮮度に私より敏感である。審美感の繊細さ、道義的感覚の鋭さは、女性のもつ優れた能力であるように思われる。人間の世界の秩序を維持する上で女性が果たす役割は大きい。

妻は平凡な女性であるが、そうした美德は、われわれの求めるマドンナの素材の一つにはなるはずである。マドンナは特定の女性の姿をとって現れるというよりは、平凡な女性の中に、その広大無辺の徳の一部が平凡な姿で生きているといえないだろうか。

政治家が聖書を読むとき

対談者 高松教区司教・田中 英吉

昭和四十七年四月号「カトリックグラフ」誌上での故田中英吉司教との対談。大平思想の信仰上の裏付けを知るための数少ない貴重な資料。

『在素知賢』に収録後『大平正芳全著作集』6巻に収録。

聖書の人間関係に興味

田中 もう十年ほど前になりますか、ローマで当時の教皇・ヨハネス二十三世にお会いになられたのは。

大平 ええ、そのころです。

田中 私、その様子をテレビで拝見しまして、とても好感もったのを覚えています。

大平 そりゃあ、どうも（と苦笑しながら田中司教に会釈）。

田中 いや、お礼をいわなきゃいけないのは私どもの方で、実際、政治家の中にこれで味方が一人ふえたと思いましたがもの（笑い）。

残念なことに、これまでバチカンに好意的な政治家は日本に少なかったと思います。その意味で、大平さんのような協力者を得たことは、こころ強い限りです。ことに、日本の精神界は混乱してるでしょう。ですから、大平さんこそキリスト教を通じて国民に精神的な示唆を与える人物だと、こころある人は期待していると思いますね。

大平 そうまでおっしゃられると、こりや大変な重荷ですわ（とテレる）。

田中 そのヨハネス二十三世がお書きになった『地上の平和』という本があります。（紙袋から取り出して）これですがね。中を読みますと、「宝のあるところにころがある」と書いてある。つまり、経済に宝の基準をおけば日本人のようにエコノミック・アニマル呼ばわりされても仕方のないこころの持ち主ということになる、というわけですよ。で、結論として人間に大切なものは、お互いの人間関係、人格を重んじ尊敬し合うこころ。

大平 （深くうなずきながら聞いている）

田中 その件に関連していいますと、南米なんかを回ると、とくによくわかるんです。日本へ帰ってくると、たいていの人は「むこうは遅れているでしょう」というんです。なるほ

ど、南米には日本のような経済成長もないし、立派な新幹線や文化施設はどこにもない。ですがね、南米の人たちが伝統的にもっている暢気さというか人柄のよさ、そういうものを逆に日本人が忘れてるんじゃないかと思うんですがねえ。

大平 そんな面があるかもしれません。

田中 （話題をサラリと変えて）聞くところによりますと、大平さんは聖書の研究に大変ご熱心だとか。

大平 （笑って）そういわれるほどのことじゃないで、ね。私は若いとき聖書の勉強をさせていただいた。聖書の立派な味、ほんとうのこころを汲みとることがまだ出来ないでいるんです。（少し間を置いて）つまり、こういう感じですねえ。あのキリストを中心にした人間関係……多くは弟子、政治家、王様、王女、それに漁夫や百姓もおれば、盗賊や遊女もある……そういう絢爛たる人間の横のつながりから、私は非常に教えられるんです。

それで私、現代もそのままだと思うんですね。とくに、あの弟子たちがそれぞれの立場でキリストに対してとった姿勢に興味があるんです。

田中 やはり、われわれと聖書の見方が違う。政治家的な発想ですな（笑い）。

歴史二千年、短いです

大平 キリストの周辺に多くの人が集まったとき、彼らはキリストを中心にした神の国で自分たちがどういう役割りをもつかを考えてるんですね。ところが、キリストが孤独な立場になり、世間から棄てられて最後に十字架にかけられる過程では、キリストを裏切ったりして去っていく人が出てくる。無知といえは無知ですが、この世界が神の国に変わるんだと俗っぽい夢を抱いていた人が失望したわけですね。

（しばし絶句のあと確信に満ちた表情で） だけど、あのキリストの中に神を見てた人はおったんです。神の国はそんな甘いもんじゃなく、キリストの形相の中に、キリストの死のもとにあるんだと見てた人は、みなまっとうな道を歩いてるでしょう。一大小説ですね、聖書というのは。しかも、飾らない事実だけが書いてある。いいことも悪いことも、真実も嘘も、虚栄も実行も、ね。そういうこと、現代も変わりませんね。だから聖書を読むたびに、人間っていつも同じなんだなあ、と思ってるね（笑い）。

田中 ええ、同じことです、いつの世も。

大平 そういえば、宇宙の起源からいうと、二千年という歴史、ある意味で短い歴史です

な。

田中

（大平氏の気宇広大な発言に去勢された格好で含み笑い）

大平

短い歴史だから、人間がそんなに進歩するはずがないですよ。

田中

そりゃそうです。われわれ進歩したかと思うと死ななきゃならん（笑い）。繰り返しですね。

（感心の面持ちで）しかし、そういうふうに聖書をご覧になることには頭が下がります。

私どもにはオーソドックスな学問として、きれいごとで済まそうというところがある。小説家の稲垣足穂という人がある雑誌で「いとわしい死刑台である十字架をもって、人類救済のしるしに変えたのは、ただ一人キリストがいるだけ」といっていますが、飾らないありのままの姿を聖書から読みとる知恵というか勇氣、それを忘れちゃいけませんね。

大平

キリストの言行をまねる、キリストの模倣……そういう野望を私はもてませんね。人間がつまらんから（笑い）。だけでも、神を中心に集まっている人間の中で、どの人の生き

方が正しかったか、間違っていたか……（思い出すように）遊女（マグダラ）のマリアですか。あの人は貧しい人ですね。ああいう人のまねだったら、できるんじゃないかと思えます。

田中 親しみがもてるんですね。

大平 ええ。キリストは高すぎて、とつても近づけませんけど、ね。

田中 聖書の中で、どれがお好きですか？

大平 旧約だったらエレミヤが好きですね。エレミヤという人が伝えたあのペーソス……なんともいえない味があります。

田中 (笑い顔で) こいつはかなわんわ。

大平 新約はどなたも個性的にとらえていますな……マタイにはマタイの味があるし、ヨハネにはヨハネのよさがある。中で格調が高くて一番アピールするのはローマ書じゃないでしょうか。

田中 私どもが聖書のすばらしさを百回説教するより、あなたの鶴の一声の方が日本人に説得力がありますよ (笑い)。

大平 あのエレミヤは……なんですね……彼が考えている国家に対する愛情、忠誠心……それが現代人の参考になるもの、多いです。

田中 (手に負えない、とでもいいかげん表情で) ますます、かなわん。結局、私らあまりにもきれいに料理しすぎたキリスト教を学んで説教したり、聖書の研究会をしますけど、

自分の体験や意識を織りこまなかつたら、力が弱いということですね。つくづくそう感じます。

（真剣な顔で）それで、聖書の力が大平さんの政治の上に活かされれば「鬼に金棒」でしょう。話は最初に逆戻りしますが、現代の日本人は働くことを最高の美徳のように考えている。なんのためにこの世に來たとか、人生の目的は何かとか、あまり考えませんね。大平さんも明治年まれだと思いますが、是非はともかくとして、昔は教育勅語のような精神的基盤があった。現代は時代も違いますし世界的な視野も必要ですが、ただこれからの日本に教育勅語に代わる精神的な柱が、もっと具体的に欲しいなあ、と思います。

丘の頂上に幸せなし

大平 私はね、いまの日本の時点に立って考えると、いままでの日本は全体として欠乏の日本だったと思うんです。つまり、人間は多いのに、国のかたちを作って西洋諸国に早く追いつかなきゃならんし、外敵も防がなきゃならん。そういうことをやっていくには、あらゆるものが足りない。資源も知識も足りないし、技術や組織も不足している。全体の欠乏です

ね。欠乏の状態だったから、いま司教様がおっしゃったように、みんな働いて充足を求めたんですね。そうこうするうちに、富める人と貧しい人の経済的な不平等が生まれてきた――

田中 社会主義思想が起こってきたゆえんですね。

大平 はい。それは悪いことじゃないんです。けれども、その根本で物に対する獲得欲というか、物質に対する過剰な期待が支配したと思うんです。ところが、戦後日本の生産力が伸び、技術が活用され、組織が整備されて、日本の経済が非常な躍進を遂げましてね。その結果、食べ物が増えられてきた。その次に着る物もどうにか間に合うようになってきた。いま不足気味なのは住宅ですな。住宅を標準化しようと、いまやっているわけです。だけでも、われわれが欧米諸国に追いつこうと息せききつて丘の頂上に上ってみたら、どっこい、その周辺に幸せはなかったというわけですね。豊かになればなるほど、不安な材料がふえて、世の中が落ち着かない。

田中 なるほど。ようわかります。

大平 だからといって、日本が歩んできた道はムダだったとは思いません。だが結果として、進路を見失うことになった。最近になってようやく、人間の魂は富や物質的な豊かさだ

けでは満足しない、ということがわかりかけてきたと思うんです。

田中 そうですね。確かです（と三度相槌）。

大平 従って、もう物質的な成長を追い求めるのは利口なやり方じゃない、GNP万能主義はもう止めにしようじゃないか、われわれは静かな環境と清い水、それにうまい空気と豊かな緑が欲しい、というような、ね。これは、ええ風潮だと思っんです。

田中 教育者に聞いても、何か物足りなさを感じ、もがき求めているのがいまの日本人だ、というんですねえ。

大平 その通りですよ。資本主義や共産主義について議論する時代は終わっただんです。そういう哲学から解放されて、新しい哲学とは何か、新しい生き甲斐や価値とは何か、を深く考える時代に入ったんです。

田中 長い苦勞の結果、日本人がようやく目覚めたんですな。それじゃ、これからは日本もよくなる……。

大平 （田中司教の語尾をはしょって）日本をよくする——なんて簡単にいいますが、人間社会は聖人の集団じゃないですからね。ま、いろんな人間がおって、勝手に気ままな劇をやっているから、一口でよくしようとはいえませんよ。また、決してよくはならない。だから

らといって、神さまがわれわれに対して無慈悲で愛情が足りないかという、僕はそうじゃないと思うんです。愛情がおりだから、物事を手軽くできないように配慮されている、と思いますよ。

田中 実によくわかります。

聖書は真理ですなあ

大平 人生には、いろんな困難がありますね。その困難の道行の中に、神や天国との接点があると思うんです。あの弟子たちは神の国でキリストの一番近くに座ることばかり考えていた。そうなれば、憎しみも嫉妬もない神の国が完成するんだ、とね。ところが、その考えは甘かったわけですね。そこでいまの世の中を、闘争のない理解と信頼と愛情にあふれた国にするにはどうしたらいいかを考えてみますと、とても一筋縄じゃいかんですな、この問題は。

日本は立派なものにはなりません。なったら大変ですよ（笑い）。そこで私たちは何をなすべきであるか、ですがね。地域社会とか職場とか小さな家庭とか、交友の人間関係の中

で、回りの人を利用して財産を持とうとか権力の座につこうという営みじゃなくて、友だちを慰めたり、わずかな持ち合わせのものを分け合って食べるとかの営みを懸命にやっていくその姿、その中に神の国があるんじゃないですか。

田中 はあ、大平さんの意図がよくわかります。

大平 だから、綱引きのようなものだと思うんです。このままだと闘争や対立ばかりが強くなって、人間的な信頼や理解の価値が失なわれてしまう。とめどもなく国内が乱れてしまうんです。だから、なんとかして失われた人間性を引き戻さなきゃならない……聖書に「汝らは地の塩たれ」とありますが……私は少なくとも地の塩的な役割りを果たしたいと思うんです。だから僕はキリスト教の哲学は「永遠のいま」だと思っていますよ。

田中 そう。いまが永遠、ですね。

大平 神の国が山のかなたにあるんじゃないかって、いま、ここにあるわけだから、きょう一日精いっぱいやってみようという精神的なゆとりが大切です。だって、いまや日本とかアジアとか世界を考えて、いったい何がありますか。

田中 きょうが神の国につながっていると思うと、一刻もおろそかにできません。（真顔で）それにしても、大政治家の考えておられることはすばらしい。司教が集まったとき、一

つ説教を頼もうかしらん。

大平 （大いにテレて）とんでもない。聖書は偉大な文学だということです。文学というより真理です。

田中 講演のとき、聖書のことばを必ず入れられるそうですね。

大平 （一段とテレて）いやいや、そんなことはないんですけど、ね。ただ若いころキリスト教と仏教の勉強したのを、ときどき思い出して楽しんでるだけなんです。

田中 大平さんは、自分に厳しいですか？

大平 そうありたいと思つてますが、難かしいですなあ。

田中 （笑つて）私なんか、ときどき人に厳しくなつてね。ところで、私は大平さんと同郷なんです、高松の街は変わりましたね。

大平 そうですね。昔の姿をとどめているのは西通町くらい、ですか。

田中 ええ。でも日本人が忘れた風俗や人情が四国には残つてますね。防衛庁長官になつた増原恵吉は私の同級生なんです。宇和島中学の……。

大平 ああ、そうですね。ありやう……。

田中 彼は偉くなりました。昨年、仙台の航空機事故で責任をとつて辞めましたが、いい男

です。

それにしても、きょうは大平さんの内面の豊かさを知って意を強くしました。知らない人が多いんじゃないですか、お顔を見て、親しみ持てるぐらいに思うだけだね。それだけでは……（笑い）。

大平 （満面に笑みを浮かべて）いや、それでいいんですよ。香川県の企業にも学校にも、すぐれた人がおると思っていますよ。それこそ、総理大臣にもつてきても立派につとまる人が浜の真砂ほどおると思っています。それなのに歴史のいたずらとでもいうんですか……私なんか香川県を代表する人物だ、なんてね。中身はお粗末なんです（ハッハッハッと豪快な笑い）。

田中 そういうお気持ちがあるがたいですね。いや本当です。たいていの政治家はそれがない。お互いの立場で、“地の塩”になるようがんばりましょう。これからのご活躍をお祈りします。

転換期における自由民主党の在り方

昭和五十二年八月三十日幹事長として党の「夏季全国研修会」で講演。

「自民党は国の公共財」と喝破し、その重責を果たす党改革を力説。

『風塵雜俎』、『回想録・資料編』、『大平正芳全著作集』4巻に収録。

序 説

党本部主催の研修会に奮ってご参加いただいた諸君を、まずもって心から歓迎いたしたいと存じます。

論語に「少にして学べば壮にして為すあり、壮にして学べば老いて衰えず、老にして学べば死して朽ちず」という言葉があります。われわれは不断に勉強しなければなりません。とりわけ諸君のように若いときに勉強しなければなりません。何となれば人間というのは、若いときに人間としての骨格が出来るものであるといわれており、若いときに勉強して身につけた素材で、自らの人格が形成されるものであるからです。私のように老境に入る

と、頭が砂漠のように渴きかつ散文化して、知識の吸収力や物事に対する感動の度合が、にわかには衰えを見せるものであります。勉強は吸収力の強いときにこそ精を出すことが肝心であると存じます。

本日のお話は、「転換期における政治運営の指針」といういかめしい題名になっておりますが、べつだん堅苦しいお話をするつもりはなく、いわば転換期における自由民主党の在り方はどうであるべきかについての考えを申し上げ、諸君のご参考に供したいと存じます。

参議院選挙の教訓

(1) 参議院選挙の結果

まず話の順序として、この夏行なわれた参議院の選挙の結果から、私どもはどういう教訓を汲みとるべきかについて申し上げます。

この間の参議院選挙における各党派別の当選者を昭和四十九年の参議院選挙のそれと比較すると、自由民主党がプラス三、社会党がマイナス一、公明党は増減なし、民社党はプラス一、共産党はマイナス八ということになり、社会党と民社党は相殺され、共産党の減が新自

由クラブ四と社市連一、それに自由民主党プラス三に移っております。これはいわば微調整というもので、政治の基盤にいわば大きい地殻変動はなかったともいえるかと思います。

一方、党派別の得票率ですが、前回に較べて、全国区で自由民主党がマイナス七％、社会党がプラス二・二％、公明党はプラス二・一％、民社党がプラス一・二％、共産党がマイナス一％となっており、地方区では、自由民主党がプラス〇・八％、社会党がマイナス〇・一％、公明党がマイナス六・四％、民社党がプラス〇・一％、共産党がマイナス二・〇％、となっております。

自由民主党の全国区、公明党の地方区の激減は、何れも両党が公認候補を極力絞るという戦術上の方針が大きくひびいているので、その点を除けば党派別の得票率においても、これまた微調整にすぎない結果に終わったことを示しております。

(2) 投票結果の示唆するもの

こういう選挙の結果をどのように受け止めるべきかということであるが、まず有権者が政局のはげしい変化を望まず、現状に大きい不満をもっていない、いわば現状肯定的な意識をもっているものとみるべきではないでしょうか。

さらにこのことは、野党という野党連合政権という観念論に冷い反応を示したものと受けとることができます。いつの選挙においても、野党の中には、すぐにも反自民の野党連合勢力をつくり上げて、自由民主党政権にとつて代わることをつたい上げる党があつたが、今回もその例外ではありませんでした。野党連合勢力というのは、それを結成する場合に社共と社公民の何れを軸とするのか決めていないし、また決められそうにもない。全野党連合の形でその結成をはかるというのはいっそうむずかしい相談でありましょう。ところが選挙になると、この古い歌は、いつの場合でも無造作に歌われてきました。有権者はその都度、そうした古い歌には一向に耳を藉さなかつたし、今回の場合もそうであつたように見受けられます。

さらに今回の選挙では、新自由クラブをはじめ社市連、革自連、女性党なども選挙戦に打って出て、すこぶるカラフルな選挙になつたが、有権者はこういういわば素人的な政治活動に対しても冷たい反応を示しました。

(3) 無党派層の肥大化

ただ一つ、私どもが注意しなければならないことが静かに進行中であります。最近の世論

調査によると、支持政党なしとするものが全有権者の二〇%から四〇%に急に上昇しております。ここにいう無党派層の急激な肥大化は、われわれがよほど注意しなければならない傾向であると思います。

政治学者は、いわゆる無党派層を形成する実勢力は、大きく分けて次の三つがあると言っております。一は主婦であり、二は退職者であり、三は若者であるということです。

主婦はこれまで日夜家事と育児に追われ、情報を十分摂取し消化する暇がなかったようです。ところが家庭の電化をはじめ、省力的な機械や設備が普及しましたので、主婦はいまや情報を豊富に摂取できるばかりでなく、それを消化する時間を持つようになってきました。その結果、政治についても主体的な意見を持ち、政治に対するその影響力は、その数の優位と相まって益々強いものになってきました。しかし、この主婦の願いや憂いに有効適切に答えている政党はまだないということです。

次は退職者であります。わが国の高年齢社会化の進展とともに、われわれは定年後における第二の人生をどう生き抜くかという切実な大問題に直面することになってまいりました。そしてその退職者の数はこれから二十五年間ぐらいは増すばかりであります。この人たちの願いと憂いに応えることができている政党もまだみつからないというのが現状であります。

次に若い青年男女であります。日本の二十代の若者は、優生学的にみてたいへん秀れているといわれ、意識状況もまたおおむね健全であると申されております。NHKは、昭和四十七年と五十一年に、十八歳から二十二歳までの若者の意識調査をしております。これによると、友達とか坐禅というようなものが、この四年間に青年にとつて魅力を増してきております。保守、革新の何れの政権を望むかについても、革新待望論から保守待望論に向けて見事に逆転を示してきており、若者は全体として保守的傾向を強めているように見受けられます。しかし、それが直ちに自由民主党支持に直結するということではなく、彼らは既成の政党に魅力を感じているようには思われないというのが実情であります。

(4) 残された教訓

参議院選挙が示す結果は、およそそのようなものだと思いますが、それでは有権者は、わが自由民主党に対してどういう反応を示したかということについて申し上げます。

結論からいうと彼らはどうも自由民主党がいかから積極的に支持しようというのではない。自由民主党にはその体質からいっても、その組織から見ても、またその政策を吟味してみても、何れも十分合格点を差し上げるわけにはまいらない。しかし、自由民主党が軸に

なつてしっかりしてもらわなければ、政局の安定も、政策の推進もできる相談ではない。だから、自由民主党に圧倒的な支持を与えることはできないが、自由民主党の議席が過半数を割るような事態は何としても避けなければならない。右の手でお灸をすえながら、左の手でこれを鞭撻する。いわば有権者は自由民主党に対してそういう態度をとってきたように思われます。私が有権者が示した「絶妙な平衡感覚」と申したのはそのことであります。

学者によると、今度の参議院選挙においても去年の暮れの総選挙においても、勝った政党はなかった。ただ、無党派層がジリジリ肥大化する結果をもたらした。しかし同時に有権者の意識は、大体において健全で、政党や政治家が自信過剰や驕慢に流れることを戒めながら、しかも政局の安定をいちじるしく失うようなこともないよう、心にくいまでの絶妙な平衡感覚をもって堅実な判断を下したと申すことができます。そして自由民主党に対しても「自由民主党よ驕るなかれ」、しかし「自由民主党の責任は重いですよ」という警告と激励を同時に与えているように思われるのであります。

自由民主党の評価

(1) 民主政治における政党の役割

私は、現代は政党政治の時代、政党による民主政治の時代であると思います。それは世論が浜の真砂のように細分化されてくると、このままではこれを吸収消化することができないものではありません。その混沌たる中に政党が介在して、これをいくつかのキャンペーンに整理、区分けをすることになります。各政党は、それぞれ自らの政策を掲げ、選挙を通して優劣を争い、過半数を制した政党が政権を担当する仕組みが出来ます。これを複数政党による議会制民主政といいます。

政党は、もともと有権者の信任を受けなければやっていけませんので、その体質、組織、運営、政策何れの面においても、自ら最善と信ずるところを実現するよう努力いたします。しかし、その実現の方法は政党によってちがいます。私は、これを大きく分けて、社会を変革することをねらいとする革命的な政党と、そうではなくて、社会の在り方の根本はそのまま尊重しながら、事態の部分的な改善をねらいとする民主的な政党とがあると思います。前者は自然、独善的、閉鎖的になりがちであり、後者は当然、民主的、開放的な方向に傾斜す

るようになると思います。前者は党の規則や組織は厳しいもので、党に対して高度の忠誠を求めるようになるものであり、後者はそれに較べて自由で弾力的な規則や組織をもち、党自体もそんなに嫉妬的ではたく、むやみに高度の忠誠を求めるようなことはいたしません。

(2)自由民主党の特長と弱点

その何れが望ましい姿であるかの判定は、究極においては判定者その人のイデオロギーにかかるといえましょう。しかし、わが国のこれまでの経験によると、他の先進民主主義国の多くもそうであるように、後者のような性格をもった政党が、民意に投じて多くの同調者の獲得に成功し、政権を担当し、よく時代の要請に対応力を発揮してきたように思います。わが自由民主党は、その中でも最も成功した事例の一つであるといってもいい過ぎではないと思います。革命的な政党というものは、組織も立派だし、党規も厳しいが、専門店のように限られた人しか同調者として集めることができないようになり勝ちです。

自由民主党は、まず長く政権を担当して、わが国の戦後経営に成功いたしました。そして広い見識と豊富な経験、さらにはバランスのとれた感覚を身につけることができ、各界から多彩な人材を吸収することに成功しました。また自由民主党は、最も広い裾野を持つ政党と

して、右から左、大企業から零細企業に至るまで、あらゆる地域、あらゆる職域を通して広く国民各層をその同調者の中に吸収し、日常生活の中に巧みに政治を持ちこむことに成功した政党であると思います。

一方、しかしながら、自由民主党の歴史を回顧すると、党規の弛緩、考え方や行動、さらには政策の面におけるマンネリズム、とりわけ数々のスキャンダルが発生に見られるように多くの過ちや行過ぎを犯してきました。いわば最も人間くさい政党でもあったといえます。

だから自由民主党という政党は、近代的な意味で目鼻立ちのよい政党とは決していえないし、クリーンで恰好のよい政党ともいえません。したがってまた国民の間に人気のある政党とはひいき目に見ても思えないのであります。しかし、わが国の戦後経営は、この政党が主役になって遂行され、まれに見る成功を収めたことは事実であります。また、戦後の経営が世界的に大きい試練に直面し、遂には戦後の経営に落伍する国々が多い中であって、わが国は経済のバランスとその自立の達成に成功しているが、それはとりもなおさず自由民主党の持つ対応力の強さを示しているものといえましょう。自由民主党はサブレッドのような恰好よさはもっていないが、コッテ牛のような強靱な実行力はもっている政党であるといえま

す。自由民主党は、その意味で、わが国がもっている一つの大切な公的財産であるといえるし、このような政党はつくろうとしてもそんなに手軽につくることができるものではありません。われわれは、自由民主党を大切にしなければなりません。それは自由民主党員のためであるとともに、国民のためでもあると思います。

自由民主党の改革

(1) 改革の道標

およそ政党ばかりでなく、人間のつくる組織体は不断に自己改革を進めなければ、その生命力を維持することができません。自由民主党もその結党以来、絶えずその改革について論究を重ね、改革の実践もしてきました。今年の春からとりかかっている改革も、その一環であります。今回の改革は、去年のロッキード事件による厳しい試練を受けて、この際、これだけは何としても改めておかねばならないという切実な願いをこめてのものであります。

その第一の道標は、自由民主党を議員党的な政党から、開かれた国民政党に脱皮させよう

とするものであります。第二のそれは、自由民主党の組織の周辺に自由国民会議をつくつて、自由民主党員ではないが、自由社会を守るといふ共通の願いをもつ同調者を組織し、自由民主党の党勢の強化をはかろうとするものであります。第三のそれは、党費の値上げと自由国民会議の会員からの会費の受入れによる財政の民主化とその強化をはかることであり、第四のそれは、既存の派閥の解消と広報活動の強化による、党運営の民主化と活力化をはかろうとするものであります。

党を開かれた党にするためにわれわれがまず手を染めたことは、これまで国会議員と一部地方代議員に限られていた総裁選挙の権利を、広く党員全部と自由国民会議の会員に開放すること、正に画期的な改革であります。

われわれ自由民主党の所属議員の多くは、党の組織よりも自らの後援会組織により強く支えられて政治活動をやっております。後援会員は必ずしも党員ではありません。また世の中には自由民主党を理解し支持はするけれども、進んで党員にまでなるつもりはないという人も多いのであります。そうした人々を自由国民会議という名において組織化し、党勢拡張にご協力を願うと同時に、一カ年一人一万円の会費の拠出をお願いして自由民主党の財政の民主化と強化の一助にしようとするねらいが、第二の改革であります。国民運動本部において

は、究極の目標として全人口の約一%を会員にお願いすることにしております。

自由民主党の財源が、その大半を少数の企業連合体に依存していることは事実であるし、これは必ずしも正常な姿とはいえません。この状態の是正は必ずしも容易ではありませんが、われわれはどんな困難があつても、その是正に真剣に取り組まねばなりません。そこで差し当たり、われわれは党費年間千円を、原則として三千円に改めることと、自由国民会議の会員に一人年一万円を会費としてお願いすることにしたのであります。

最後に党運営の改革であります。まず既存派閥の解消であります。人間は派閥的な動物で、三人集まれば二つの派閥をつくるといわれております。そしてそれは、政界だけでなく、実業界、教育界、学界、宗門、スポーツ界、芸能界その他人間活動のあらゆる面に見られる事実であります。またその分派性の強さも、特に政界においてひどいものがあるということでもないようであります。しかし、政界、とりわけわが自由民主党は天下の権を預っている政党であります。それだけに派閥的な思惑や行動が、政治運営の公正を犯すことになりはしないかという国民の懸念に対しては、われわれは謙虚な態度でこれを受け止めなければなりません。そのために既存の派閥は、ともかくも理屈をいわないで解消することにしたのであります。

もつとも派閥は情報の交換、教育や研修を通してそれなりに有益な機能を果たしておりました。そうした有益な機能は、これからは党が代替して行なうことにし、このように党本部主催の研修会もやっておりますし、党本部に「リバティ・クラブ」という社交倶楽部を設け、党員相互の交歓の場といたしてもいいのであります。

さらに党の広報活動ですが、これがどうもこれまで十分でなかったし、他の党に較べて見劣りがすることも否めません。われわれは政権をもっており、貴重な情報源を豊富多彩にもっているのですから、もつともつと質の良い情報を提供できない筈はありません。われわれは、この点にいつそうの努力と工夫をこらして、国民のニーズにこたえてまいりたいであります。

要するにわれわれは自由民主党を愛し、その改革を通じて、その民主化と活力化を推進し、政権政党の重い責任を十分果たしてまいらねばなりません。諸君のいつそうのご精進をお願いして、私のお話を終えたいと思います。ご清聴を感謝いたします。

新権力論

前尾↓大平への宏池会会長引継ぎ決定の頃「日経新聞」昭和四十六年三月九日に発表。後に「権力について」と加筆改題して『硯滴Ⅴ』に収録。『回想録・資料編』、『大平正芳全著作集』3巻に収録。

マキアベリーというと、一般に権謀術数の権化のように理解されておるようだ。たしかにマキアベリーの哲学は権謀術数と深いかわりをもっておるにちがいないが、そのような理解は、機械的であり一面的であるように思われる。

マキアベリーは、人間のいとなみは徳の実現を究極の目的とすべきものであるが、われわれが弱い人間はいわば盲目的な運命に押し流されておるもので、このままでは徳を実現することにはならない。したがって運命の奔流を制御して徳の実現に至る手段と術策を工夫し組織しなければならない。そこにいるところの権謀とか術数とかいうものが考えられることになるというのが、マキアベリーの哲学の骨組みのように私は理解しておる。

権力というものを考える場合にも、権力自体の構造や機能を掘り下げるだけではなくて、

それを必要とするより高次のものを予定しておるものだという消息を心得てかかる必要があるように思われる。権力というものが、それ自体孤立してあるものではなく、権力が奉仕する何かの目的がなければならぬはずだ。権力はそれが奉仕する目的に必要な限りその存在が許されるものであり、その目的に必要な限度において許されるものだということだ。

このようにいってくると、問題は至極簡単なようであるが、むしろかしいのは何が目的かということである。マキアベリ―流にいうと何が徳の実現になるかということである。今日の日本の状況において「平和」とか「福祉」とかいえば、何人にも異存のない高次の目的たり得るものである。「富強」とか「快適」とかになつてくると、必ずしも説得力をもった目的にはなりかねない。ところが、一応万人に異存のなさそうな「平和」とか「福祉」とかいても、その内容は必ずしも明確ではなく、人によつてその理解するところが多様に分化して帰一するところが見付けにくい。

たとえば平和ということは、戦争のない状態というのであれば今日すでに実現されておることである。それだけではだれも満足しない。国の内外を通ずる積極的な秩序にささえられた、もっと具体的内容をもった平和でなければならぬ。そこまできると、問題はイデオロギーの領域にはいつてくる。また福祉といつても、単にGNPだけで計算できるものではな

く、もつと積極的にわれわれに生きがいをもたらすようなものでなければならぬ。

もつとも現実の権力は、その当否はともかくとしても、それなりにこういう高次の目的に對して、ある種の考え方を予定し、そういう状況をまもる限りにおいて、自らの権力の存在理由があると考へておるにちがひない。どんなにお粗末でも権力のための権力を考へておる権力はいない。その場合でも、権力の主体は往々にして「安定」といふような高次の目的に藉口することを忘れてはいない。

もともとイデオロギーとなると、果てしなく分化し歸一するところはない。それを一つにしぼることは全体主義国家でも、人間の改造のない限り、できる相談ではない。しかし、世の中にはイデオロギーにはあまり関心のない、ないしは関心のうすい層があるものである。しかもそれは相当広範に存在するものである。権力が考へなければならぬのは、自らのイデオロギーに同調と理解を求めることよりは、こういう無関心な厚い層をいかに自らの存在に有益なもの、ないしは少なくとも無害なものにする工夫を通じて、自らの基礎をかためることではあるまいか。

それにしてもそのことは決して容易な仕事ではない。圧制や懷柔でできることにも自ずから限界がある。一時を糊塗することができても長く信頼をかちとることは至難である。そこ

に術策とか手段、つまりマキアベリーのいうネセシタのもつ限界というものがある。権力にはもつと深い根元的なものがなければならぬ。

東洋においては為政の根本を手段に求めずに権力の主体の人格に求めてきた。制度や法の精緻な網に期待するよりも、主体側の徳望に求めてきた。まず己を知り、己に克ち、己を尽くすことが為政の根本であるとされてきた。その消息は、何も東洋の専売特許ではない。西洋の政治思想にもうかがわれるものである。

元来、権力というものが人の意識に上らない状態こそが政治の理想とされてきた。そうだとすれば改めて権力論が問われるようなことはあまり歓迎すべきことではない。しかし世界史の運命がけわしくなってくると、か弱い寄る辺なき人間がその奔流に押し流されることを黙視するわけには行かない。権力は全身全霊の力をこめてその奔流を制御し、人間を守らなければならぬ。そのためにはあらゆる術策を用意しなければならないのは已むを得ないことである。

しかし権力の本体は、そういう術策にあるのではなく、権力者自体の自らの在り方にあるのだということだけは銘記すべきであろう。術策の分量やその組み合わせの巧拙よりも、権力主体のあつめる信望の大きさが、その権力に本当の信頼と威厳をもたらすものである。ア

ンドレ・モローアは「他人を支配する秘訣は、自らを支配することを得ることにある」と言っておるが、権力の主体に対する頂門の一針というべきものであろう。

成田委員長のよさと限界

昭和四十三年十月五日、政調会長時代に「東京新聞」に執筆した人物論。『硯滴川』に収録後、加筆訂正して『旦暮芥考』に収録。のちに

『回想録・資料編』、『大平正芳全著作集』3巻に収録。

消息筋によると、成田君は委員長になることを終始固辞していたという。勿論、だれが委員長になろうと、今日の社会党の再建は容易な仕事ではない。成田君は、それだけに先ず党の結束を計ることが至上の課題であるとして、みずから委員長にならない方が得策であるとの考えに立っていたようだ。

ところが、先月の大会の経過と結果は成田君の願望が不毛に終わり、社会党はみずからの体内の人事的対立の深さを天下に暴露してしまった。成田君としてはまことに不本意のことであつたろう。しかも、今次の大会はその彼に党の指揮をゆだねることになった。

成田君は、私と同じく香川県の名門出身であり、高松中学から旧制四高を経て東大の法科という恵まれたコースを順調にたどった。東大卒業後三井にはいり、終戦の時には三井化学

の文書課長であった。その後政界入りをしたのだから、いわゆる組織の出身者ではない。海千山千の闘士でもなければ、赤貧洗うような苦勞もしていない。いわば誠実で平凡なホワイトカラー出身の理論家である。その成田君が、党の書記長として立派に名声と実績をあげ、先般佐佐木委員長と共に書記長を辞してから後も、成田委員長待望の声が燃焼を続けていたのは、ほかならぬ成田君のクセのない誠実さと、理論的節操のもつ魅力といえよう。

社会党はここ数年来、各地区、各選挙区を通じて停滞が続き、衰退の兆が見え始めていたが、今次参議院選挙ではついに大敗を喫した。とりわけ意外なことは、大都市における退潮が目立ったことである。これにはいろいろの理由があげられ、且つ究明されている。労組に依存してあぐらをかき、議員のモラルの低下は不祥事件の連座者さえ出すに至ったこと、派閥の対立と結束の弛緩、日常活動や政策のPRの不足が見られたこと、その他いろいろの原因があげられている。

しかし、多くの論者が指摘するように、最大の原因はなんといっても市民社会の構成が多様化し、政治に対する欲求と不満が多岐になってきたのに、社会党がそれらの情勢に的確に対応できず、それらの不満を十分吸収できなかったことだと思う。もとより、このことは言うに易く行なうに難いことである。そういう情勢への対応力や不満の吸収力については、独

り社会党ばかりでなく、自民党もまた責められるべきである。ただ自民党は、政権をあくから立場にあるので、事態の流動的な変化には、否応なしに対応しなければならなかった。もとよりその対応は十分の計画性とか展望をもったものではなかったが、ともかくも対応してきた。ところが社会党はそうではなかった。

社会党は、客観情勢の変化に直面しながら、みずからの教条の下にかくなく硬直化し、柔軟性を失っていなかったとはいえないように思う。極端にいうと、教条には誤りはないが、事態の方に誤りがあるとでもいいたいような風情が見られないではなかった。勿論、みずからの信奉する教条をみだりに掲げたり下げたりすることは、政党にとって自殺的である。その意味において本来政党というものは「非寛容」な組織ではある。しかし非寛容は独善であってはいけない。国民あつての政党であるからである。

私は、成田君を誠実な理論家として尊敬している。そして彼は終始社会党の教条を最も忠実に守り、且つ主張してきた。そのこと自体立派ではあるが、そこに客観情勢の変化に歩調を合わせる柔軟性が認められなかった。そこに社会党と成田君のよさもあれば限界もあるように思われてならない。

国内では、市民社会の構成の多極化を反映して、多党化の傾向は動かしがたいものとなり

つつある。同時に各勢力のいたずらな対立によつては解決し得ない新たな問題が、雨後のたけのこのように生起してやまない状況である。そして政治の無能力が厳しく問われている。自民党も社会党も、その共通の仕事として、政治の対応力を取り戻さなければならなくなつてきている。

世界自体も、各陣営を通じて多極化し、イデオロギーを越えて、各民族国家がその生存と安全の道を個性的に追求しだしている。ナショナリズムは再び往時の勢力を回復しつつあるかに見えるが、その背後には、核エネルギーの制御というような人類共通の課題が巨姿を現わしてきた。

こういう変化に背を向けていては、自民党も社会党も、その営み自体が政治にはならないのである。私は成田君が優れた多くの同志の英知とエネルギーを結集動員して、弛緩の色を濃くした党内各派を本流に集め、その愛する社会党の新時代に即した脱皮と飛躍のため、全力を傾けられることを期待してやまない。それはひとり日本社会党のためばかりでなく、日本の政治全体のためでもあるからだ。